

オリンピック、その報道と教育

季刊誌 第4号

—2021年冬号—

一般社団法人

子ども未来・スポーツ社会文化研究所



はじめに

オリンピック、その報道と教育

子ども未来・スポーツ社会文化研究所「季刊誌第4号：2021年冬号」をお届けします。

パンデミックとなったコロナ禍で、1年延長されて開催された東京2020オリンピック・パラリンピック大会は、さまざまな問題が露呈しました。新国立競技場をめぐる設計の変更、エンブレムの盗作、開催延期における意思決定、組織委員会会長のハラスマント発言と相次ぐ辞任、聖火リレーの強行、ボランティアの辞退、復興五輪の希薄化などなど、オリンピックの負の側面が明らかになり、ある面、オリンピック神話が崩壊し始めた感があります。と同時に、オリンピックとは何なのかという根本的な問いかけがなされました。

とりわけ、無観客開催ということで、われわれはテレビや新聞等のメディアを通して、オリンピックを見聞することとなりました。

そこで、第10回記念オープン・セミナーでは、NHKでスポーツ実況に長らく携わってこられた山本浩（法政大学教授）氏に「スポーツ実況の真実」をテーマとして、テレビの実況中継の特徴とは何なのか、スポーツアナウンサーが大切にすること、スポーツ中継の変容、インタビューの実態等についてお話をいただきました。そして、スポーツ実況の歴史と沈黙の効果について、黒田勇（理事：関西大学教授）氏にコメントをいただきました。この誰でも参加できるオープン・セミナーには、60名近い方の参加がありました。

また、第11回セミナーは、長年にわたって新聞記者としてオリンピックを取材してこられた本研究所の主席研究員である速水徹氏に「オリンピックとメディアー新聞の取材現場からー」をテーマとして、歴史的な視点から、オリンピックに新聞はどのようなスタンスで向き合い、報道を展開してきたのか、新聞記者の取材は、実際にはどのようなものなのかについて、取材現場からの報告をしてもらいました。そして、新聞という報道メディアのジャーナリズムの在り方について、黒田勇（理事：関西大学教授）氏にコメントをいただきました。

さらに、無観客開催によって、学校から観戦に行くことができませんでした。そのことは、オリパラの教育的意義を問いかけることになったのです。そこで、第12回セミナーは、オリンピックを社会学の視点から研究されている石坂友司（奈良女子大学准教授）氏に、スポーツやオリパラの持つポジティブな価値に触れることができが目指され、学校教育に組み込まれてきたオリパラ教育で、具体的にどのような活動が展開されたのかを概観しながら、そこに内在する問題点、可能性について語っていただきました。そして、1964年東京オリンピックの私的体験から、今回のオリパラ教育の意義について、杉本厚夫（代表理事：京都教育大学・関西大学名誉教授）氏にコメントをいただきました。

ご一読いただき、皆さんからの忌憚のないご意見をいただければ幸いです。

●第 10 回記念オープン・セミナー・・・P.3～

日時：2021 年 9 月 24 日（金）20 時～21 時 30 分

ナビゲーター：山本 浩（法政大学教授）

コメンテーター：黒田 勇（理事：関西大学教授）

ファシリテーター：杉本厚夫（代表：京都教育大学・関西大学名誉教授）

テーマ：「スポーツ実況の真実」

国民の広範な関心を集めた東京オリンピック・パラリンピックは、比較的高い視聴率を残しましたが、スポーツアナウンサーたちの張り上げる声には自制が効いていたように思います。無観客、豊富な映像、頻繁に出るスローモーション。今のスポーツ中継がどのように作られ、マイクの前に立つ者がどう振る舞っているのか。放送を見続けてきた専門家が、その考え方や変化を細かく分析します。

●第 11 回セミナー・・・P.14～

日時：2021 年 10 月 22 日（金）20 時～21 時 30 分

ナビゲーター：速水 徹（主席研究員：元朝日新聞論説委員）

コメンテーター：黒田 勇（理事：関西大学教授）

ファシリテーター：杉本厚夫（代表：京都教育大学・関西大学名誉教授）

テーマ：「オリンピックとメディアー新聞の取材現場からー」

様々な議論を呼んだ東京五輪の閉幕から 2 か月が経ちました。マスメディアのひとつである新聞は、メガスポーツイベントの五輪をこれまで、どう報じてきたのでしょうか。肥大化や商業化が指摘される五輪に新聞はどのようなスタンスで向き合い、報道を展開してきたのか、新聞記者の五輪取材は、実際にはどのようなものなのか。記者や論説委員の立場で五輪報道にかかわってきた実体験を踏まえ、現場の観点を交えて報告します。

●第 12 回セミナー・・・P.27～

日時：2021 年 11 月 26 日（金）20 時～21 時 30 分

ナビゲーター：石坂友司（奈良女子大学准教授）

コメンテーター：杉本厚夫（代表：京都教育大学・関西大学名誉教授）

ファシリテーター：速水 徹（主席研究員：元朝日新聞論説委員）

テーマ：「オリパラ教育は日本社会に何をもたらしたのか」

開催の是非に揺れた東京オリパラの検証が始まっている。多様な主体が大会によるレガシー（遺産）を生み出そうと取り組みを行ってきた。オリパラ教育もその一つで、スポーツやオリパラの持つポジティブな価値に触れることが目指され、学校教育に組み込まれてきた。具体的にどのような活動が展開されたのかを概観しながら、そこに内在する問題点、可能性について、スポーツ社会学の観点から明らかにしていきたい。

《第10回記念オープン・セミナー》

スポーツ実況の真実 —技術革新／イノベーションの中で—

山本浩（法政大学教授）

1. 大きな関心 東京 2020

まず、東京 2020 オリンピック・パラリンピック大会の関心がどれほどだったのか、ここから始めましょう。数値データが出ています。ビデオリサーチの調べた、開会式をライブで見た人の人数ですが、7300 万人あまり。おそらくテレビ関係者はここまで行くとは思っていなかつたのではないかという数字です。関東地区の数値が主たるものになっていますから、関西にいらっしゃる方々は「俺達は違うぞ」というところも多少あろうかと思います。

日本の人口は 8 月 1 日現在、総務省の統計発表で 1 億 2530 万人。それから考えますと、かなりたくさんの方がご覧になったことがわかります。百分率で言えば 58%です。

過去の視聴率では、これより高いものがありますが、今回緻密に調べた中では、相当に関心が高かったのだなという印象です。改めて申し上げれば、人数は 7326 万 8000 人。前回のオリンピックでは「リオデジャネイロ五輪の開会式をテレビやインターネットで視聴した人は 4230 万人だった」とリオ大会後に日本経済新聞が報道しています。リオは地球の裏側で時差もありますから、こういう数字になったのだろうと思うのですが、それにしても、非常に高い数字だったことがおわかりいただけるのではないでしようか。

2. スポーツアナウンサーのラジオによる実況トレーニング

今日のテーマであるスポーツアナウンサーが、その後のオリンピック放送の数字にどの程度関わったのか。定かなことは申し上げられませんが、たくさんあるアナウンサーの仕事のうち今日は部分的な所から紹介を始め、全体像を捉えるためのヒントにしていただこうと思います。

オリンピックに携わるアナウンサーたちが、いずれも早い段階で経験をしている「いろは」の「い」の部分からお話ししましょう。

スポーツ放送で求められる基礎的なアナウンスは「実況」という状況描写です。眼前で起こっている出来事を見たままことばで追いかける。どんなスポーツでもいいのですが、選手がプレーしている姿を目の前で見せられ「さあ、しゃべってみろ」と言われるのですけど、いきなり立て続けにすらすらとことばが出てくるものでもありません。とつとつと、あるいはぼそぼそとしゃべったものがそのまま商品になるかというと、そんなことはないのです。

スポーツアナウンサーを目指す人間の多くはこれまで、野球の放送を目指して、特にラジオの実況を想定して練習を重ねてきたはずです。最初は高校野球の練習試合が多いのです

が、ピッチャーが振りかぶってボールを投げるときの様子から始めて、選手の動きを描写していきます。

まずは「第1球を投げました」。続いて「第2球を投げました」「第3球を投げました」「第4球を投げました」とバッターが打席を終えるまで繰り返します。一人の打者について伝えただけでは形などできはしませんから、100回、200回とずいぶん回数やらないといけないのです。ポイントは、「第1球を」のあとでことばを一瞬切ることです。「第1球を」の「を」を発するタイミングと投手の手首が返る動きがシンクロしているかどうか。そして「投げました」を口にするタイミングで投手が後ろから腕を回ってきて、中指が身体から一番遠いところに行く。その瞬間、つまり「投げました」の「た」が発音されると同時にボールが指先から離れるという、こういう感覚なのです。いろいろなタイプのピッチャーがいますから一本調子にするのではなく、見たままに柔軟にスピードを変える。なかなか簡単ではないのです。

次のステップは、ストライクかそれともボールだったのかを言わなければなりません。「B (ボール)」か「S (ストライク)」かが言えるようになったら、あとは情報をどんどん増やしていく方式です。何日もかけて練習すると、なんとなく形がついてきます。やがて球種を、そしてどこへ投げたのかを言う。情報量を増やしていきながら、最終的にはアウトになるところまで伝える。これが「いろは」の「い」の部分です。

このように、バッテリー間に限定した描写ができるようになれば、次には打者や打球の動きも伝える必要が出てきます。さらにレベルが上がれば、パターンのようなものも覚えなければいけません。たとえば盗塁のシーンです。「第4球を投げた」「カーブ」「空振り」「ランナースタート」「キャッチャー二塁へ」「ショート、ベースカバー」「タッチする」「セーフ」「盗塁成功」「1アウトランナー二塁、カウント2ボール2ストライク」。これが一つの塊として伝えられなければいけません。最初の頃は紙に書いて、そらんじて何度か言ってみて、現場に行ってやってみるというようなことを繰り返しやっていきます。状況が2アウトになってしまっているかもしれませんから、パターン化しては処理できないのですが、何度も繰り返しながら実際のプレーヤーの動きに合わせて、間髪を入れず口について出るようにしていくわけです。

ラジオ放送でこれを聞くと、「第4球を投げた、カーブ」でバッターボックスの打者を頭の中に想像し、「空振り」というところで、打者にボールが来たのだなと感じます。「ランナースタート」では、まるでカメラが一塁ランナーのスタートのシーンを捉えているような状況です。「キャッチャー二塁」で今度はキャッチャーにカットが切り替わり、さらに「ショートベースカバー、タッチする、セーフ」となるわけですが、ここはタイミングを少しおかなければいけません。二塁のアンパイアが両手を広げるタイミングと「セーフ」のコメントを合わせていかなくてはいけない。そして総括です。「盗塁成功、ワンアウトランナー二塁、カウント2ボール2ストライク」とこのプレーに終止符を打つのです。このようなことを、オリンピックに来たどのアナウンサーも最初に学んでいるはずです。

3. ことばの使い分け

しゃべっている者は、テレビもラジオも同じなのですが、音の響きというのを大事にします。今、自分が言うべきことばを堅い単語で言うのか、柔らかい単語で言うのか、それを瞬時に判断して選択をしていきます。さらに固有名詞、数字。この二つを敢えて使うことによって、流れが締まるという感覚を覚える自分もいます。だらだらしゃべってしまって緩んだように感じたときは、数字を口にして締める。「ここでなんで数字なのだろう」というシーケンスで、アナウンサーが数字を語るとしたならば、気持ちの中で何か締めたいのだなと理解していただければ良いかも知れません。いきなり 800m のスタートの 30 秒ぐらい前に、オリンピック大会の数字の「32 回」ということばを言って、「東京オリンピック」と言ったとしたら、「今、800m の前でそのようなこと言う必要ないだろう」とお思いになるでしょうが、しゃべっている側からすると「第 32 回」と言っただけで、自分の気持ちを締める感じになるのです。このあたり、放送している今のアナウンサーたちの心境もおそらく昔とそんなに変わっていないと思います。その他よく使うのは体言止めです。「第 32 回東京オリンピックです」ではなく「第 32 回東京オリンピック」と言って止め、次の間をうまく生かしながら、そこにつながるフレーズを起こすのです。

音（オン）の響きというのも、しゃべっている側にとっては非常に大事なテーマです。特に子音、硬い音です。アナウンサーは、<T><P><K><D>こういった音で始まることばを大事にします。「トップ」などというのは、堅くていいことばなのです。「トップをとった」と言うだけで、締まる感じです。一方で撥音の小さな「っ」なども、ある意味で効果のあるものです。さらに、音読みの漢語です。「突破」「決定的」「瞬発力」。「ダブルプレー」「ガッツポーズ」なども喜んで使われます。それによってある種の緊張感というのでしょうか、弛緩しているものを締める感じが出てきます。例えばランナーが盗塁を成功させた、あるいは難しい当たりでクロスプレーで入ったとき、こういうことばを使って締めるということをよくやります。逆に柔らかい音、具体的に言いますと<H><M><N><R>などは緩む雰囲気につながりますから、きわどいプレーでは出番が少なくなるようです。

4. テレビの実況中継の特徴

基本的な実況に使われることばの話をラジオの例を挙げて簡単にご紹介したのですが、次にテレビの実況中継を少し考えておきたいと思います。アナウンサーのする仕事は、状況の描写、心理描写、そして自分が調べてきたことの情報の提供が柱になっています。さらに、ほとんどの場合は解説者がいるので、必要に応じて質問をすることも重要な業務です。そして音響効果。時には、にわかに大きな声でしゃべって音響効果を出したりもします。それによって何か盛り上がった感じが出ることがあります。見ている人聞いている人の注意を喚起するというのでしょうか。そして時には分析することもありますね。現在ではプレーの分析は主として解説者が詳しくするのですが、時間が限られているようなときはアナウンサ

一自身が短く分析をする場合があります。そしてあまり気に留める人はいないでしょうが、時間の調整。これもアナウンサーの大事な仕事なのです。

経験を積んでくると映像選択の指示をすることもあります。国内の通常のテレビ放送ですと、アナウンサーが特定の場所や人物を口にして少し長い描写になったりすれば、ディレクターが気を利かして、その映像を選択してくれたりします。アナウンサーが「久保建英はどうも左足を痛がってますね」とつぶやくと、画面に久保建英の左足が映る。これは、ディレクターがアナウンサーのコメントを聞いてカメラマンにアングルを注文し、スイッチングでこれを放送に載せてくれるからです。けれども、オリンピックの放送ではこうはいきません。国際映像といって、全世界に基本的には同じ映像が送り出されています。カメラマンに注文して画作りをする国際映像のディレクターは、特定のアナウンサーの声など聞いていませんから、誰が何を言っても、その映像が出てくることはありません。あくまでディレクターの判断で映像が切り替えられていきます。このあたりがオリンピックのような国際映像でする仕事と国内放送の仕事との違いであり、かえってアナウンサーがいつも以上に神経を張り詰める要因にもなっています。

ラジオのアナウンサーの仕事は描写に時間を割くことが多く、「選手やボールの動き」「人間の配置」「戦う者の心理」などを伝えるのに多くの時間が使われます。解説者に聞く時間よりも、描写にかける時間が非常に長いです。自分で調べた情報の提示もありますが、描写の中に情報を織り込んでいくスタイルが多いのではないでしょうか。

一方でテレビの場合は、情景や目に見える変化を画面に捉えてくれますから、動きの描写、配置の説明は少なくなります。逆に目には見えにくい、心理面に言及する回数が増えるかも知れません。解説者とのやりとりの中で「こういう気持ちじゃないか」「こうするのではないか」などですね。科学的なやりとりではなく情緒的。そのときの流れに応じて心理描写をしたがるケースが散見されます。現代のスポーツ中継の映像は、情報の提供は、CG（コンピューターグラフィック）、あるいはその他のキャッチフレーズやタイトル的なもの、字幕スーパーが頻繁に出てきます。音声と現場映像以外の字幕やCG、文字による情報が非常に多いのです。

5. スポーツアナウンサーが大切にすること

ラジオもテレビも大切にするテーマは「同時性」です。起こった瞬間に伝え、すぐさま注意を喚起するとでも言うのでしょうか。そうすることによってリズムが生まれます。放送のリズムでもあるのですが、リズムが良いというのは、目の前で演じられているプレーのレベルが高いということにつながります。眼前のプレーの価値を理解しないままの実況、例えばつまらないことにこだわったり、勝敗から遠いのに叫んだり、何か過激な形容詞を使ったりすると、多くの人にとっては「うるさいな」となってしまうことがあります。プレーの価値をよくわかった上でしゃべっているアナウンサーの放送は、試合が壊れていなければ、それ相応に心地よいものです。アナウンサーが同時性を守りながらリズムを大事にしてくれて

いれば、それだけで、力の差のあるチーム同士の戦いであっても、それなりに聞かせてくれるのでです。

スポーツ中継に取り組む人間に関して言えば、どういう選手をどこで使うのか、誰をどこに起用するのか、どういう交代をするのか、「人事」についての感覚の鋭さを、レベルの高いアナウンサーは持っていないといけません。しかも、戦術についてある程度理解していないことには、解説に適切な水を向けることができません。そこをわきまえていれば目の前の戦術変更に驚いてみせることもできるのです。驚くと言っても、大事なのは見ている人が最終的に驚いてくれるかどうかです。アナウンサーはちょっと驚きの反応を見せるだけで十分。答えを解説者から聞いた途端に、アナウンサーが「なるほど、そうでしたか」と大声でやつてしまふと、やりとりが解説者とアナウンサーとの間で完結してしまいかねません。となると聞いている側の人はやや疎外感を感じることになってしまう。放送としては避けたいのが正直なところでしょう。

アナウンサーは、声にする、声にしないという判断も大事にします。プレーをしている選手が通常の呼吸している間は、われわれは情報提示や会話や心理分析をやります。つまり危急の時ではない場合です。一方で、選手が息を止めたら、速やかに実況に変わるので。逆に言うと、選手が通常呼吸をしているような時間帯に実況するようでは、「このアナウンサーはしゃべることが見つからないのかもしれない」と思った方が良いぐらいです。まだ経験が浅い場合にも、解説者と折り合いが悪い場合にもそんなことは起こりますが（笑）。選手が息を止めている時間帯は実況中心になりがちですが、それが長いこと止めているからといってずっと実況し続けるのかどうかと言えば、アナウンサーのレベルによって出し方が変わってきます。いかに見せるか、いかに感じてもらえるか、いかに想像させるか、腕の見せ所なのです。

実況描写、描写すべき局面は勝負に関わるプレーです。得点の変化、選手の変化、作戦の変化ですね。競技特性がそれぞれありますが、時間や距離や得点経過で勝負に変化が生まれてきます。卓球などは、肉眼では勝負の細かい部分の見極めが難しいスポーツです。見方を変えれば、卓球はテレビで放送するときに実況ベースだけでは伝えきれない競技の一つなのです。

6. アナウンスの力量

「映っていないものは伝えない」。このスタイルは非常に多いのですが、「映っていないけれども伝える」。こういう姿勢を貫くこともあります。「映っていないから伝えない」というのは、頻繁に起こることなのですが、「映っていないけど伝える」も当然あるわけです。それから、「映っているが伝えない」。一番当たり前なのは「映っているから伝える」というのですけど、この「映っているものが平凡」なときに長々とそれを伝えると、見ている側はまたうるさく感じるのです。映っていないものを伝えると、「何か大変なことが起こっているのだな、でも早く映して見せろよ」という感じになってしまふ。「映っているのに伝えない」

というのは、見えてないというケースもありますけれども、レベルの高いアナウンサーですと、「映っているのに伝えない」ことをあえてやるケースがあるのです。この部分の伝え方でアナウンサーの能力のあるなしというのはある程度想像がつきます。この「映っていないのに伝える」それから「映っているのに伝えない」。実況の方法論をどう駆使して、勝負と絡めて伝えているのか、このあたりがアナウンサーのレベルによって違ってくるのです。

プレーの描写で、ホームランとかゴールといったエネルギッシュなシーンだけを取り出してみれば、人によっての実況の優劣はなかなか分別がつきません。パワフルな瞬間の描写は誰がやってもあまり変わらないからです。ところが、動きの緩いシーンでは力量差がはっきり出でます。アウトオブプレーでどう伝えるかは、次のインプレーの描写に影響します。アナウンサーが平常心でしゃべっているところは、勝負への関与の少ないプレーの場面が多いのですが、ここで何をつぶやいておくかが、その後の展開に非常に大きな影響があるのです。大相撲の中継で言えば、経験の豊富なアナウンサーほど、取り組みと取り組みの間のしゃべりが非常に高いレベルで終始します。放送回数は減りましたが藤井康生アナウンサーなどは、こうした技術を持った人間の一人です。

スポーツ実況だからと言って、プレーの描写にとらわれてばかりいては仕方がないのです。伝えの奥に世界観とか哲学といったものを持ち合わせているのか。監督が何をどう配置して、どういった指示を授けたのか、肝心の勝負の周りに何があるのか、どこにどれほど最善を尽くした跡があるか。こういうものを、その場で見つけながら端的に口にできること。それそのものがぼんやりと感じられて、それを解説者の口から引き出せるか。これもまた非常に重要なテーマです。

7. スポーツ中継の変容

今度は、映像面から見る最近のスポーツ中継に関してお話ししましょう。この10年、20年でずいぶん変わりました。今回のテレビをご覧になっていてそういったところ、お気づきになったかと思います。何が変わってきたのかといえば、「休みなく魅力的な映像を提供するテレビ」の時代に突入して10年以上経つという点です。アウトオブプレーからインプレーになって、どこかでまたアウトオブプレーになる。どの競技でもそういったことが勝負の中で繰り返されるわけですが、このアウトオブプレーが昔の映像では今よりもずっと長く続きました。インプレーの時間が短くて、アウトオブプレーが長い。アウトオブプレーの長いのをそのまま見せながら、アナウンサーと解説のやりとりを聞かせていたというのが、当たり前の放送パターンだったのです。

体操を例に挙げれば、演技の壇上、プラットホームに上がって準備をし、介助者の手を借りて鉄棒にぶら下がると実際に演技を開始する。演技の中では途中で離れ技をやって、やがてフィニッシュになる。始まる直前から、鉄棒にぶら下がって、演技を始めて、最後のフィニッシュ、ここまでが言ってみればプレーの時間です。この間はずっと実況ベースです。ところどころで技の名前を言う。それが、選手がフィニッシュして降りてニコッとした瞬間か

ら点数が出るまでの間の時間、これがかなり長いのですが、アナウンサーは解説者に語りながら一生懸命いろんなことをしゃべるわけです。感激して一気呵成にしゃべるケースもあるでしょうが、スローモーションが出てくるまでの時間つなぎも少なくありませんでした。

ところが今や、EVS（ベルギーの会社、1994年設立）のためにスポーツ映像はあるようなものです。このEVSとは、録画をしながらスローモーションの装置を再生させることができるシステムです。ホームランを打たれるシーンを想定してみれば、「投げる」「打者のバックスイング」「バットインパクト」「へたり込む投手」といったシーンを、それぞれスローモーションであつという間に見せてくれるわけです。常に魅力ある情報提供をするというのがEVSの役割です。

通常のプレーをカメラがどう捉えているか、想像してみましょう。例えば野球のホームランの画作りです。まずピッチャーの「投球」があります、打者が「打撃」をします。カメラは打たれたボールを追いかけます。打球はやがてスタンドに入ります。切り替わったカメラは、途中で拳を上げながら一塁を回ろうとする打者走者を捉えます。野手がグラブを地面に投げつけたり、投手も帽子を脱いだりするシーンが挟まれるかも知れません。そういううちにEVSの登場です。ホームランを打った選手が一塁を回りかけたところで、それまでのスローモーション映像が次から次へと出てきます。投手の投球フォーム、打者のバットの返し、打球から振りまかれるロジン、スタンドに向かって球速を上げる打球、立ち上がる観客席など。バッターランナーがホームに到達する直前でEVSは終わり、最後にホームインのライブの様子が映る。こんなシーン、皆さんは当たり前にご覧になっていることでしょう。

今回もオリンピックの映像ではEVSに繋がっている画面は、非常にたくさんありました。装置は大規模なものが必要なわけではありません。スローモーション画像を選択するコントローラーとハードディスク、そしてそれにつながるテレビカメラがあればできてしまいます。とはいえ、テレビ局はこのシステムの為に非常に高いお金を払っていかなければいけません。

このEVSのおかげで何が変わったか。放送席の会話の内容に変化が生まれました。近過去、つまり直前に終わったことについて語る時間がうんと増えたのです。次々に現れるスロー再生の説明をする時間が非常に長くなりました。かつては「さあ、この後ウクライナの選手は得意の鉄棒、離れ業をどうしますか」というような話。あるいは、「イングランドの選手には着地で痛めた足が気になりますが、跳馬での影響は」と未来形の話をしていましたが、そういうものが吹っ飛んでしまっているのです。未来を語る機会が見つけにくくなり、過去の技術論中心のアナウンスに終始する。「すべてをより魅力的な映像にすることによって、視聴者を引きつけたい」こうした映像制作の流れが、スポーツの試合の見方に大きな影響を与えてきたように思います。

溢れかえる情報源を前に、技術情報過多になつてはいないでしょうか。EVS、多彩な情報源、見ている人に飽きさせることなく、間断なく情報を届ける。放送の変容は、技術戦術

の解説、それが予想機会の減少に繋がっているのではないか、そんな感じがしなくもないのです。

8. インタビューの実態

今日、もう少しお話をしたいのは、インタビューに関してです。いろいろなことが私は気になりました。元来、インタビューをされる側の状態には、いろいろなものがあると思います。

例えば「心の温度が高く、心拍数が低い」選手。サッカーを例に挙げれば「残留に成功したリザーブの選手」とでも言ったところでしょうか。「心の温度が高くて、心拍数が高い」のは、「アディショナルタイムの勝ち越しゴールの得点者」ですね。「心の温度が低くて、心拍数が高い」のは、「大差で勝った試合の最後まで戦った選手」。「心の温度が低いが心拍数も低い」というシーンに該当する人は当然いるわけですが、こうした人にマイクを向けるのはよほどないとありません。いずれにしても、聞かれる側の心温と心拍数を思いながらインタビューに臨むのが原則です。

インタビューは、質問の流れに目を凝らすと時制がパターン化しがちです。「現在」で始まり「過去」「未来」へと転換しながら聞きたがるのです。聞き手の能力によっては、話のサイズを意識していることがあります、「大」「小」「中」「大」と焦点の絞り方によって話の広がりをコントロールすることも可能なのです。ただオリンピックのときにはそこまで適用できる人は多くありません。何しろ「メダル」という大きなテーマが邪魔をして、思ったような構成で聞けないことがあるからです。

試合後のインタビューは本来、試合と一体不可分なのですが、オリンピックの場合は通常とずいぶん違います。例えば、インタビュアーの出入りできる通路が限られている場合があります。そのためにインタビュアーが当該試合を全部見ていられるかというとそうでもないことがあるのです。そのあたり、非常に悩まされるところです。

大事なのは、インタビュアーが一体誰のために選手の話を聞いているのか、勘違いしないことです。オリンピックの場合には、試合直後には限られた時間しか使えません。時間が短いということは、大切なことから聞く原則を大切にしなければなりません。一方で、相手の言った答えを受け止めて次の質問をしなければいけないのですが、経験が少ないと、最初から質問を決めてしまっていくケースも目立ちます。オリンピックには、こうしたパターンがやや目立ったようにも思います。選手の答えでよくわからないところがある、あるいは質問に対して答え足りないところがあれば、インタビュアーは聞き返さないといけないのですが、柔軟にできる人間がそれほど多くないのではないかと思えてなりません。

選手や監督の答えは本来、視聴者のものです。インタビューする人間のために答えているようで、その答えは視聴者に向かっています。聞き手のことばを短く、答える側のことばをたっぷりできるかどうかは非常に大事なポイントです。時として大上段に振りかぶったことばを使うことがあります。「期待」だとか「感動」「夢」「劇的」など、こういうことばで

くくってしまうインタビュアーほど、経験が浅いように思えます。

選手がしゃべらないことも、なかなか来てもらえないこともあります。直前まで誰に聞くか決まらない、必ずしも機嫌が良くないようなこともあるでしょう。オリンピックの場合には、試合を終えた選手はまず中継放送局のアナウンサーの質問に答える約束になっています。それからミックスゾーンと言って一般の記者がいる場所を通り、呼び止められたら質問に答えます。それが終われば、記者会見という正式にセットされたところに出てくるわけです。

オリンピックでは、インタビュアーがその競技の専門であるとは限りません。短期間に複数の競技を担当するのが当たり前ですから、経験の少ない競技となれば「なんとか感動的な答えが欲しい」とか「強い意志を見せてくれ」と短兵急になつたりすることがあります。直に強いことばを求めたりもするでしょう。一方、聞かれる側も、通常と違ってオリンピックの結果は重大に受け止めがちです。ミスをしている自分、完璧でなかつた戦いぶりなど、自分ではそれなりに判断のつくことがあります。それを口にしたものかどうか、考えておく必要があります。

インタビューのタイミングが、準決勝のあとであった場合には、戦術上の秘密にかかわるからと決勝の話ができない、そういう条件もあるでしょう。そんなときに限って歯切れが悪かったり、素っ気なかつたりするのです。一方、終わってしまった後は、感情の高ぶりもあるのでしょうか、やにわに「次のフランスのオリンピック」と言ってしまう選手が目立ちました。冷静に考えれば代表権を取ったわけでもないのに、そこまで言ってしまっていいのかどうか。そういうふうに言わせてしまう側にも問題があるのではないかと思うのです。

今回のオリンピック選手のことばで印象に残ったものをまとめてみました。「悔しいというよりも、悔しいんですけど、自分がこの 5 年間やってきたことの答え合わせが終わったなと思った」とは、バドミントンの奥原希望さん。

卓球の石川佳純さんは「自分の得意なスピードのラリーにしてもらはず、対応しようと思ったんですけどうまくいかなくて、3 ゲーム目リードしたのに残念」。このあたり非常に冷静です。キャリアを重ねてオリンピックに何度も出てインタビューを受けている人たちは非常に優れた自然な答えをしてくれるのです。

これは大迫傑選手です。「6 番に上がったところで前を追ってみたんですけど、15 秒ぐらいかな、ラップが縮まらなかつたので、確実に 6 番で粘り切ろうと思って走りきました」。走り終わった直後でしょうが、彼も非常にしっかり自分を表現しています。心情も良く伝わってきます。

しかしそれ以外のケースで、予想を超える答えがいくつか耳に残りました。言ってみれば「反省」を口にする場面です。質問の投げかけ方に、反省のことばを拾おうとしているところが多いのではないかと思わせるやりとりです。あるいは逆に、選手側から無意識のうちに「反省の場になつてしまつた」というのかもしれません。インタビューは実は反省、すなわちリグレット (regret) の場ではないのです。インタビューというのは、レビュー (review)

の場であってもらいたいのですが、謝罪の場にはしてもらいたくないです。長い年月をかけてさまざまなサポートを受けながら準備をしてきたことを、一人で即座に振り返ってリグレットしないで欲しい。私は、今回のインタビューを見ていて、このリグレットとレビューの問題を日本のスポーツ界は考えていかなければならぬのではないかと強く思った次第です。

＜黒田勇（理事・関西大学教授）のコメント＞

私は全く違う角度でお話しをします。実況中継といえば、今、山本さんがまさに名調子で語られた通り、語りということがポイントになります。少し歴史を紐解きますと、ピツツバーグの KDKA 局で 1920 年に放送が開始されました。その半年後にはボクシングの実況中継を始め、同じ年にワールドシリーズのスポーツ放送を始めたと記録には残っているのですが、非常に面白いことに、現場による実況中継ではないのです。通信社が送ってきたデータに基づいて、放送局のスタジオで、さも見ているかごとく語るという形だったのです。1920 年代の半ばぐらいまでは、それが一般的であって、現場で選手がプレーをしている様子そのまま語るというような中継はなかったようです。ですから、音声メディアであるラジオにおいては実況放送というのは、まさにコメンテーター、アナウンサーの語りによって、ファンは想像をかきたてていくってことだったのです。アメリカでは語りの名手として、レッド・バーバーという人が伝説の人、レジェンドとしています。この方はボイスオブドジャースと言われて、ドジャースのコメンテーターを長くされた方で、メジャーリーグの最初のテレビ放送もこの方が実況中継をされたということです。

日本においては、昭和 2 年（1927 年）の 8 月に甲子園の初放送があったのですが、その時の魚谷忠さんという人の語りは、今の山本浩さんの名調子とは全く違って、「ほら、投げた」、「さあ、打った」というようなことだったようです。市岡中学の名選手だったこの人は、アナウンスでも大阪弁で実況中継するので、今で言うところの共通語に直すように特訓されたという話も残っています。

同じ頃から神宮の中継が始まるのですけども、そのとき放送した日本放送協会の松内則三さんは、「神宮球場にカラスが二羽、三羽」というような情景の描写があります。これは日本では 1927,28 年ぐらいになると、現場からの中継になりますので、その状況を見て語るということになります。それにしても、その場面が見えてないわけですから、多くのリスナーたちは音声による新たな娯楽、新たな物語を楽しむという、この時代に新たな娯楽が誕生したと、メディア史、メディア論から言えます。

アナウンサーの名調子というのは、ラジオとともに誕生して、さらに少し余裕が出てきますと解説者が登場します。その中でも一番有名な人は小西得郎さんで、「何と申しましょうか」というような言い方をされ、この小西さんの名調子で、野球をいかに伝えるかというよりも、その人たちの語りによる新たな物語を楽しむというような新たな娯楽が生まれたと言われています。そこから半世紀たち山本浩さんの名実況が生まれていくということです。

これは授業でも取り上げていることなのですけれども、こここのところを続けて沈黙の中継というので、いくつか有名なものがありました。シチュエーションが違うのですが、2006年のドイツワールドカップのときのオーストラリア対日本の試合です。1対0で日本が勝っていたのですが、ロスタイムに入って3対1というとんでもない逆転負けをします。そのときに3点目を喫した瞬間、約30秒間、NHK栗田晴行アナウンサーは沈黙するのです。近くでは2015年のワールドカップラグビーのイングランド大会ですね、南アフリカ対日本の試合で、ロスタイムの80分超えてからの日本の攻めの中で、歴史的な逆転勝利をおさめるわけです。その逆転のトライを決めた瞬間、同じくNHKの豊原謙二郎アナウンサーは40秒間沈黙します。この2人のアナウンサーとも非常に感動的な沈黙だったと私は思っています。つまり、沈黙によって見ていた視聴者とスタジアム、あるいは選手たちがまさにシンクロする瞬間なのです。テレビの時代で映像があることによって、視聴者、プレーヤー、観客の喜び、場合によっては落胆、失望、そういう部分をシンクロさせていく、そのためには沈黙が必要だったのです。意図して沈黙されたのかどうかわかりませんけれども、沈黙の実況というのもあるなと思いますので、このあたりも山本さんにぜひお話を伺いたいと思います。

＜山本浩（法政大学教授）の返答＞

沈黙に関して、栗田アナウンサーの沈黙は、おそらく声、言葉が出なかったのではないかという気がするのです。私も似たような経験が、あのドーハの悲劇のときにあるのですけども、何か喋らなきゃいけないという実感はすごくするのです。通常、試合が止まった、あるいは、終わった瞬間であったにしても、我々の中で30秒休む、声が出ないと、放送事故と言われて始末書を書いて、処分を受けることなのです。ですから、そういったときにはディレクターが気を利かせて場内の音を大きくして事故にならないようにするみたいなことはあります。通常は30秒という時間を黙るということは許されないのです。でも、栗田アナウンサーのあのときの状況を考えると、おそらく何も言えないぐらいにショックが大きかったのではないかという気がするのです。ですから、意図的にもし（沈黙）するのならば、30秒は持たないだろうと思うのです。

一方で、黒田先生がおっしゃってくださった名実況と言われるものなのですから、不思議なことに、放送というのは全体を聞いていただいて、それが名実況って言われることは非常に少ないのです。部分を取り上げて非常に良いと言われるのです。ですから、これが言わされている側からすると、例えば焼き魚の顔の部分が非常にうまいと、でも腹の部分は食べられないみたいなのです。絵画や彫刻というと、名作と言われるものは全体の中で部分もいいというのです。けれども、放送の場合には、ほとんどが部分のところで表現されます。逆に言うとそれをご覧になっている方々の印象というのも、全体ではなくて部分のある種のある時間帯の中のあるアクションや、あるいはそれに対する反応というのがいろんな意味での強い印象を胸の内に残すのかな、そういう感じはするのです。

《第11回セミナー》

オリンピックとメディア—新聞の取材現場から—

速水 徹（主席研究員・元朝日新聞論説委員）

1. 新聞記者にとってのオリンピックとは？

「オリンピックとメディア」について触れる場合、大別してテレビ、新聞、専門誌、雑誌など様々なメディアがある。今回はオリンピックをメディア、とりわけ新聞はどう報じてきたのか、という点について、取材現場での経験も交えながら振り返っていく。

新聞記者にとっての五輪とはどのような取材対象であるのだろうか。私が朝日新聞社に入社して間もない1983年のことだが、ある時、大ベテランの先輩記者からこんな風に言われた。

「速水は将来、どこを目指したいの？」

「どこって、どういうことですか？」

「スポーツ記者として、最終目標をどこに置いているか、ってことだよ」

そのような将来像がまだ描けないころにこう聞かれたのだが、その先輩記者が二者択一で私に示したものが、「五輪」と「メジャーリーグのワールドシリーズ」だった。

五輪と大リーグがなぜ最終目標の二択になっていたのか、ということだが、そのベテラン記者によれば、五輪は「アマチュアスポーツの最高峰」であり、大リーグは「プロスポーツの最高峰」である、ということだったわけだ。

もちろんこれは、このベテラン記者の個人的な考え方だが、当時、まだスポーツ記者の海外駐在が一般的でなかった時代、特に五輪の現地取材は目指すべき大目標のひとつであった、ということは言えるかと思う。当時は今のように夏季五輪と冬季五輪が2年ごとではなく、同じ年に夏冬の五輪を開催していたので、記者にとっても、まさにオリンピックイヤーは4年に1度。長く記者をしていても、五輪取材班に入れなかつた記者のほうが圧倒的に多いのが当時の実情だった。それくらい特別な存在であったわけだ。

2. 戦前の五輪報道

さて、五輪に関する報道はどのように進んできたのか、歴史をざっくりと振り返ってみる。まず戦前だ。

日本の新聞社が五輪を報じた最初の例として伝えられるのが1908年ロンドン五輪で、毎日新聞社初の海外特派員となった記者がマラソンについて報じたのが最初であるとされている^{注1)}。今から113年前、明治41年のことだ。ただ、厳密には五輪報道とは言い難い部分がある。仕事でロンドンに立ち寄った際、マラソンのみ観戦し、競技の起源や当日の

様子などを紹介した観戦記的なものだったからだ。

局面が変わるのは、1912年の第5回ストックホルム五輪からだ。五輪初参加を決め、選手派遣の母体となる大日本体育協会、のちの日本体育協会、現在の日本スポーツ協会だが、この協会の嘉納治五郎による設立、国内予選会の開催といった流れの中で五輪関連記事が掲載されていくことになる。ストックホルム五輪には選手2人、役員2人が派遣された。のちに日本のマラソンの父と呼ばれることになる金栗四三選手と、短距離の三島弥彦選手の2人だ。朝日新聞社はストックホルムに記者を派遣した。

開会式を伝える朝日新聞紙面^{注2)}には「オリムピック開会式」の見出しがある。英語の発音にならったのだろうか、「ム」の文字を小さくする表記が大変興味深い。記事の大きさとしてはべた記事で、大きい扱いとは言えない。このような感じで朝日新聞社は日本の五輪初参加を伝えた。五輪報道の先駆けだ。

このストックホルム大会を起点に、新聞メディアは五輪報道を拡大していくことになる。そして1928年のアムステルダム五輪までは、ほぼ同規模の取材体制が続くのだが、第2段階の大きな変化と言えるのが1932年のロサンゼルス大会だ。朝日が五輪の特派員で現地に送ったのは東京から3人、在米の特派員、臨時雇用も含めると朝日は最大の18人態勢であったと『日本新聞年鑑』^{注3)}は記録している。

取材体制の規模拡大が示しているのは、速報性を増そうという背景事情だ。同業他社との差別化を図りたいという発想が背景にあったように思う。写真を空輸し、新聞紙面をもとに原稿をつくり、届いた映像を充ててニュース映画を流すということもやっていた、との記録が残る^{注4)}。

1932年ロス五輪は、その前年、朝日に入社した織田幹雄さんが日本選手団の旗手、陸上チームの主将を務めていた。織田さんは1928年アムステルダム五輪男子陸上三段跳びで日本人初の五輪金メダルを獲得し、1931年に朝日新聞社に入社、大阪運動部、現大阪スポーツ部に所属する。私自身、大阪スポーツ部には記者、次長、部長で在籍していたので、織田さんは大先輩ということになる。織田さんはのちに朝日の東京運動部長、現在のスポーツ部長も務めた。スポーツ界での役割としては数限りなくあるが、1964年東京五輪に向けては陸上競技日本代表の総監督だった。

また、ロス五輪日本代表選手団の総務主事を担っていたのは朝日の記者でのちに政治経済部長、常務取締役などを務める田畠政治氏だった。1964年の東京五輪招致にも尽力されているが、織田さんや田畠さんのように、五輪を報じる側が五輪に関与する側でもあつた、という構図があった。朝日の五輪への強い関心と関与というものを見て取ることができる。

3. 戦後の五輪報道

戦争前後の五輪に言及するだけでも膨大なものとなるので、戦後は1964年の東京五輪に飛ぶ。東京五輪は、国家的行事の位置づけであったので、新聞社としても大きな展開を

している。

団伊玖磨さん作曲のオリンピック序曲が国立競技場に流れたのが 1964 年 10 月 10 日午後 1 時 50 分。天皇陛下ご臨場、君が代演奏のあと、選手団入場、天皇陛下の開会宣言は午後 2 時 58 分、とされているので、夕刊に記事を入れるのは相当に大変な作業であったと推察される。当時はフィルムによる撮影だから、撮影後にフィルムを持って移動、現像し、焼き付けをして紙面を組む、という時間を考えると相当猛スピードでの作業をし、輪転機を回す時間を後ろ倒しにして開会式を 1 面に置いた夕刊^{注5)} を発行したのだと思う。

1 面写真の大きさからすると、紙面は未曾有の大展開と言える。

競技の報道だけでなく三島由紀夫、松本清張、檀一雄、草野心平、有吉佐和子ら作家や詩人の寄稿や観戦記を朝日の紙面は載せ、スポーツ報道というだけでなく、文化的、社会的側面からも五輪を多面的に報じようとした報道姿勢をうかがい知ることができる。

この東京五輪以降、五輪は様々な問題に直面していく。1968 年メキシコシティ大会は、人種差別問題で揺れた大会として記憶しておく必要がある。

米国代表の陸上選手 2 人が黒人差別に抗議する意味で黒い手袋をはめて表彰台に立ち、握りこぶしを突き上げるという行動をする。陸上男子 200m 決勝でトニー・スマスが優勝、3 位にジョン・カーロスが入るが、彼らは黒い革手袋、首には黒いスカーフ、黒いソックスという姿だった。国際オリンピック委員会（IOC）は政治的行為を行ったとして、メダルを剥奪し、選手村から退去処分にした。ブラックライブズマターの原点とも言える行動だったと言える。

4 年後の 1972 年、ミュンヘン大会では五輪史上最悪の惨事が起こる。大会期間中に、「黒い 9 月」と名乗るパレスチナゲリラが選手村に密かに潜入する。大会 11 日目の 9 月 5 日午前 5 時半ごろ、イスラエルに拘束されているパレスチナ人の解放を求め、イスラエル選手団のコーチ、選手 1 人ずつを殺害し、9 人の人質を取って立てこもった。最終的にこの事件は人質 9 人、ゲリラ 5 人、警官 1 人が死亡するという事態になる。五輪期間中に、スタジアムで弔意を表す半旗が掲げられた。戦前の 1936 年、ベルリン五輪はヒトラーの五輪とも呼ばれ、ナチスの印象が濃かったため、ミュンヘン五輪当時の西ドイツ政府は一貫して穏やかな大会運営を進めた。昼間は選手村も出入り自由で、厳戒態勢ではなかった。それが裏目に出たといえる。

4 年後のモントリオール大会は女子体操で 10 点満点を連発したナディア・コマネチの活躍に沸くが、五輪が抱える人種問題、宗教問題、テロ問題に加え、開催経費の高騰という問題にも直面する。ミュンヘン大会でのテロの悪夢を繰り返さぬよう警備にも力を注いだため、経費が当初予想の 4 倍に膨らんでしまい、膨大な赤字を抱えた。ある記録によれば、赤字は 880 億円。ほぼ同額の利息がかかり、開催都市のモントリオールは長らく、税金の形で市民が負担することになる。

続く 1980 年モスクワ五輪は西側諸国のボイコットという問題が起きた。ミュンヘン、モントリオール両大会で米国を抜いて 2 大会連続で金メダル獲得首位を確保したソ連が、

満を持しての五輪開催だった。ブレジネフ政権の下、国威発揚のための大会開催に至ったわけだ。

しかし、政治の嵐に五輪が翻弄される。モスクワ五輪の1年前、1979年にソ連はアフガニスタンに侵攻する。当時、アメリカはカーター政権だったが、ソ連の行動に抗議するため、五輪をボイコット。友好国にも選手を派遣しないよう呼びかけた。結局、約50カ国がボイコットを決め、参加国・地域は約80に減る。日本はスポーツ界の猛反発にもかかわらず、アメリカに同調してボイコットを選択。4年に一度の大舞台にかけてきたアスリートたちが政治に振り回される事態に立ち至ってしまった。

人種差別問題、宗教問題、国家間対立、テロ、経済問題と、大会ごとに問題が噴出していった五輪の流れが、1984年のロサンゼルス大会で変わる。

五輪は問題続出であったため、84年大会に立候補したのはロサンゼルスのみ。五輪は都市が立候補するのだが、ロサンゼルス市ではなく市民の有志約60人が手を挙げ、招致委員会を立ち上げた。委員会を率いたのは、旅行代理店経営者のピーター・ユベロスさん。経営手腕を買われ、トップに立つ。

彼は様々なものを売って予算を組織委員会のみで捻出し、総収入は6億1900万ドル、支出は4億6900万ドルで、最終的に収支を1億5000万ドルの黒字にした。

ユベロスさんは何を売ったのだろうか？ 例えば聖火ランナーの有料化だ。1kmあたり3000ドルで売った。聖火への冒涜だ、という批判がギリシャなどで起きたが、寄付という形をとったのだ。また、連作の五輪公式ポスターを作つて販売したりもした。ヒロ・ヤマガタさんやアンディ・ウォーホールもポスター制作者の1人だった。1983年、入社したての私は、連作ポスターまで売つて運営経費に充てるロス五輪、といったタッチでその商業的側面を話題記事として取り上げた。

あと、ユベロスさんがうまかったのは、大会に必要な物品を買わず、提供してもらうというサプライヤー契約を結んだことだ。オフィシャルサプライヤー・フラワーショップなどというものがあった。これは様々な業種にまたがり、69社にまで及んだ。このオフィシャルサプライヤー方式が、その後の「物品提供による企業のスポーツ大会支援」という新たなスポンサーの在り方を作ったといえる。そして、最大の収入源は、ユベロスさんが引き上げたテレビ放映権料だった。アメリカの三大ネットワークのひとつ、ABCが支払った国内放映権料は2億2500万ドル。これはモスクワ大会の2・5倍ほどだ。

ユベロスさんはロス五輪で、五輪は黒字を出しうるスポーツイベントである、ということを示した。善し悪しは別にして、ここで五輪の流れを変えたと言っていいと思う。五輪はスポンサーにとって、企業イメージを高める上で魅力のある存在であり、金を出すに足るものだという認識が定着していく。IOCの財政基盤もテレビマネーによって盤石になっていきた。ただ、五輪は「余剰金を生み出すことのできる巨大スポーツ大会」という地位を固めたことが、逆にテレビマネーに縛られる五輪という負の側面を生み出すことにもつながったと言えるかと思う。この流れはアスリートの勝利至上主義という流れも生んで

きる。行きつく先のひとつがドーピング問題だった。

朝日新聞社は、現在ではJリーグやB.LEAGUEをスポンサードしているが、かつては報酬を目的とせず、競技そのものを純粋に愛好するアマチュアリズムの考え方に基づくスポーツ、例えば柔道や社会人ラグビー、高校野球、マラソンなどを長らく支えてきた歴史があったので、東京五輪から10年後の1974年にIOCが五輪憲章から「アマチュア」の定義を削除したことや、1986年の日本体育協会によるスポーツ憲章制定とアマチュア規定の撤廃には、懐疑的な論調を掲げた。プロ化がもたらす商業主義や、ドーピングなど勝利至上主義のまん延に批判的なスタンスがあったのだと思う。

五輪に関しても、近代五輪の土台にあったアマチュアリズムを重んじようという姿勢があったと考えられる。冒頭で触れたアマチュアスポーツの最高峰が五輪、というまなざしだ。日本体育協会が1986年5月7日にアマチュア規定を廃止した時には、翌日の紙面で「われわれは正しい道を、正しく歩いているのだろうか」と論じた。

その4年後、IOCは1990年9月に東京で行われた総会で五輪憲章を改定し、プロアマの完全オープン化を表明する。国際競技連盟と各国の五輪委員会が認めれば、プロアマを問わず五輪に参加できるという条項だ。そして1992年バルセロナ五輪が、プロアマ完全オープン化のもとで開かれた初めての五輪ということになったわけだ。

バスケットボールではマイケル・ジョーダン、マジック・ジョンソンらNBAの錚々たるメンバーを擁するドリームチームが出場するなど、五輪の風景が一変したのがこの1992年バルセロナ五輪で、私が初めて取材した海外五輪でもあった。

4. 五輪取材の実際

4.1 五輪取材は現地入りした時点ではほぼ終わっている

さて、実際の海外での五輪取材とはどのようなものなのか、という、現場感のある話題に移る。まず、私の実感のひとつは、「五輪取材は、現地入りした時点ではほぼ終わっている」というものだ。

例えば大会前にバルセロナに入ってから、自分が担当するスポーツでメダルが期待され、書き込むことを予定している特定の選手のことを取材しようと仮にするなら、例外的なケースを除いてそれは、「ほぼ無理」と言える。アスリートは目前の五輪に向け、コンディションを整えていく段階で、マスコミの事前取材に答えていたりも精神的余裕もない。五輪取材で長い読み物を書こうとするのならば、事前取材、それはその選手が代表に選ばれた時点での取材はもちろん、そこからさかのぼる1年前、あるいは2年前くらいからの取材の蓄積で、厚みのある読み物、その選手の内面に迫ったインサイドストーリーを書いていく、という感じだ。

4.2 移動の足を確保し、複数会場取材

五輪取材で大変なことの一つが、移動だ。会場が広範囲に広がっている場合は、さらに

困難を極める。公共交通機関はもちろん、大会組織委員会が準備する報道機関向けのシャトルバス、ループバスなどがあるにはあるが、取材との兼ね合いで考えた時に、本数が圧倒的に少ないので。

朝日新聞社の場合は、ロジスティック担当を務める編集局庶務部の方々が現地のタクシーやタクシーやハイヤーを2か月ほど貸し切る。レンタカーは事故を起こしてしまう危険性があるし、何より現地の道路事情を熟知していないと早めの移動ができない。移動の足はタクシーやハイヤーということになるのだが、これが、「動く仕事場」になる。

どういう意味かと言うと、五輪取材の場合、1日で複数の競技を取材して回るということが普通だ。国内、あるいは海外で陸上やサッカーなど単一の競技大会を取材する、日常的な取材活動とはこの点が少し違う。私の場合、1日4会場を回って取材、執筆を続けることもあった。ある競技を取材し、試合後のインタビューを終え、その記事をまとめる作業をするのはどこだろうか？ 競技ごとにプレスセンターがあるのだが、そこではない。移動中の車の中だ。

要は次の取材が待っているので、最初の競技のプレスセンターで原稿を書いていては間に合わない。次の会場に到着するまでに移動の車内で原稿を書き上げ、到着次第、次の取材に切り替えるという感じだ。これを3回、4回と繰り返すわけだ。持ち歩く資料も取材する競技分になるので、それなりの重さだ。スピードと質を求められる仕事で、どつと疲れる。海外五輪の取材はまさにスポーツ的だ。

4.3 プレスセンターでのドリンクは？

五輪取材ではMPCと呼ばれる取材拠点が必ず置かれる。MPCはメインプレスセンターの略だ。国際会議場のような、ワンフロアが大規模で、フラットな建物が充てられることが多い。主として世界中の新聞社とテレビ局がこのMPCに取材拠点を構える。このMPCのどの場所に、どれくらいの規模で取材ブースを確保できるか、というのも組織委員会側とのネゴシエーションによる。ざっくり申し上げると、それまでの五輪の取材実績というものが加味され、あとはお金の相談ということになる。各社が狙うのは広く、かつ入口に近いスペースだ。広域取材の難しさもあり、1分1秒が惜しまれるからだ。

MPCにはたいてい、飲み物が無料で提供される自動販売機のようなものがある。記者が五輪の取材登録をする際、その場で撮影した写真にホログラムが重ねられた偽造できないプレスカードのほかに、会場配置図などが掲載されたブックレットやオフィシャルグッズのペン、メモなどが渡される。その際、クレジットカード大の「ドリンクカード」のようなものも手渡される。五輪の公式スポンサーにはたいてい、飲料メーカーが入っているので、その企業が無償提供した飲料をいただくことができるということだ。例えば、近代五輪100周年の節目だった1996年のアトランタ五輪だが、アトランタと言えば、コカ・コーラ発祥の地だ。アトランタ五輪期間中はおそらく、一生で一番コーラを飲んだ1か月だ

ったかもしれない。

驚いたのは、アトランタの4年前の1992年バルセロナ五輪だった。まさか、とお思いかも知れないが、各プレスセンターにはスポンサーの生ビールのサーバーが備えられていた。外国メディアの人たちはもう全く平気で、昼間からビールを片手に仕事をしていた。私は次の取材にアルコールの匂いをさせて出向くわけには行かないので飲まなかつたが、ちょっと驚く光景だった。欧州の方々にはビールやワインは水替わりという感じで、アルコール飲料に対する認識が鷹揚なのだろうと思う。

4.4 ネタの宝庫は IF の五輪直前の会議

五輪は競技取材だけではない。開幕前にも記者はあちこちを動き回る。各競技の国際連盟 (International Federation; インターナショナル・フェデレーション)、略して IF と呼ぶが、この IF の多くが、五輪の開会直前に総会など大きな会議をすることがままある。各国の理事らが一同に会する機会となるからだ。こうした会議のフォローも五輪記者の仕事のひとつになる。実は、この開幕直前の IF の会議でニュースを掴むことがあるのも、五輪取材の醍醐味かもしれない。私自身の体験談で恐縮なのだが、バルセロナ五輪時の経験について触れる。

バルセロナ五輪開幕直前に、市内某所で開かれた国際ウエイトリフティング連盟 (IWF) の理事会で、私は日本ウエイトリフティング連盟の専務理事が出てこられるのを待っていた。数時間の会議を終えて、各国連盟の役員がぞろぞろと出てくる中に、私がお会いしたかった専務理事の姿があった。その表情が怪訝なものであることはすぐに察知できた。私の方から話を振った。

「なんか難しいお顔、されていますよ。」

「いやあ、ちょっと、びっくりしちゃってさあ……」と専務理事は会議での動揺を引きずっとおられる様子なのだ。

歩きながら、ここはたたみ掛けるべきだと判断した。

「なんか重い決定があったんですか？」と振ると、専務理事は、ぽろっと漏らした。

「五輪に参加する選手全員にやるっていうんだよ」

「何を？」

「開幕前に、世界からの出場選手、一人残らずドーピング検査をするって」

衝撃を受けた。ドーピング検査と言えば、抜き打ち検査が常識で、五輪直前の段階で、現地入りした全選手に事前のドーピング検査をする、などというケースは聞いたことがなかったからだ。その時点での重量挙げ競技が置かれた状況はと言うと、ドーピングが後を絶たない状態で、IOCは「薬物違反をなくさなければ1996年のアトランタ五輪から追放する」と警告していたような状況だった。

バルセロナの前の大会、1988年のソウル五輪で、世界を揺るがす大事件が起きた。陸上男子100mでアメリカのカール・ルイスを制して金メダルに輝いたカナダのベン・ジョン

ソンは9秒79という人間の限界を超えるような世界新記録で優勝したのだが、ドーピング検査で薬物使用が発覚し、金メダルはく奪、9秒79という世界記録と、前年の世界選手権での9秒83という記録も抹消され、2年間の出場停止処分を受ける事態に至った。

それでも、筋肉増強の効果が大きい重量挙げでは、ドーピング問題を一掃できていなかった。IOCの「薬物違反をなくさなければ五輪から追放する」という最大級の警告を受けてIWFはその後、①薬物違反は初犯でも永久追放処分、②その選手が属する国の選手も1年間の資格停止処分——という姿勢を打ち出し、バルセロナ五輪代表の条件も、IWFが指定する厳格な検査が行われる大会に出場した選手のみ認める、というものだった。これらに加えて、バルセロナ入りした全選手に検査を行うという決定だから、未曾有の事態だったわけだ。当然、専務理事のお話を聞いた後、MPCに飛んで帰り、現地デスクに報告をした上で、特ダネ記事として打った。

五輪出場全選手に競技直前のドーピング検査を実施するという未曾有の対応は、IFとしてのIOCへのアピールという側面も大きかったと思うが、IWF幹部としてはここで強い姿勢を打ち出さなければ、競技そのものの根幹を揺るがしかねないという、危機管理的な判断があったのだろうと思う。

4.5 人生を映す五輪

五輪取材は現地入りした時点ではほぼ終わっている、というお話をしたが、もちろん例外もある。現地での突撃取材を、スーパースターレベルのアスリートが受けてくれる場合も稀にある。

私の場合は体操女子のスペトラーナ・ボギンスカヤだった。ボギンスカヤは旧ソ連時代の1988年ソウル五輪団体総合で金メダル、個人としても跳馬で金、ゆかで銀、個人総合で銅メダルに輝いた。ソウル五輪翌年の89年には世界選手権の個人総合を制し、世界女王にも輝いている。笑みを見せず演技するその姿は冷たささえ感じさせる気品と風格があり、アイスドール、氷の人形と呼ばれていた。

そのボギンスカヤがアトランタの少し前から笑顔で演技している。アイスドールが笑っている。その理由を、私はどうしても知りたいと思っていた。「あなたが、今はなぜ笑って演技しているのかを知りたい」と取材を申し入れたところ、五輪直前であったのに「どうぞ、練習会場まで会いに来てください」とOKをくれたのだ。彼女はなぜ、今は笑っていられるのかを話したいのかも知れない、と快諾してくれた心の内を推測していた。

ボギンスカヤはスターだったが、激動の時代を生きた一人の女性でもあった。1996年のアトランタまで3度五輪に連続して出場しているのだが、88年ソウル五輪はソ連代表、92年バルセロナ五輪は前年の91年12月25日にソビエト連邦が崩壊したので、旧ソ連統一チーム(EUN)として出場、そして96年アトランタ五輪はベラルーシ代表として出場している。3度連続五輪に出場して、すべて胸につけた旗の模様が違った訳だ。

アイスドールと呼ばれたボギンスカヤはなぜ笑わなかったのか。彼女の答はこうだ。

「勝つこと、それは義務だった。重圧をいつも感じていた。だから、演技していても笑えなかった」。当時のソ連で、トップ級のスポーツ選手はステートアマだった。国家育成選手、国家のために戦うアマチュアといったニュアンスだ。ソウル五輪では団体総合の金など、十分な結果を彼女は出した。しかし五輪が終わった3日後、体操を始めた8歳のときから指導を受けていた女性コーチが自殺する。ボギンスカヤにとっては第二の母だった人だ。彼女は体操から遠ざかった。しかし、学校へ行っても、彼女はアイスドールのままだった。体操にすべてを捧げていたので、友達がいない。体操を離れても笑えなかったのだ。

数か月後、ボギンスカヤは体育館へ向かいた。「やっぱり体操は私の人生すべてだ」と気付いたそうだ。そしてソウル五輪翌年の89年に世界女王に輝き、ソ連が生んだ最後の世界女王になる。91年にソ連が崩壊。翌年のバルセロナ五輪では旧ソ連統一チームを率いて、再び団体総合で金メダル。再度の引退を決意した。その後、ベラルーシから米国のボストンに渡り、体操のコーチを始めるのだが、テレビで体操の世界選手権を観て身震いしたそうだ。「体操ってこんなに美しいのか」。初めて客観的に体操を観た瞬間だったそうだ。

彼女は現役復帰を決めた。背が高く、手足も長く、女性的な体形で、小柄な10代の選手たちがアクロバティックな技を繰り出す中で勝負になるはずがない、と批判も浴びたのだが、ボギンスカヤは意に介していなかった。アトランタ五輪直前の欧州選手権で世界女王のポドコパエワ（ウクライナ）に次いで2位に入った。体操界の事件と言えたのだが、ボギンスカヤのその時の心境は「ただ、自然と笑って演技できる自分が嬉しかった」そうだ。

五輪期間中に社会面に掲載した記事^{注6)}の書き出しは「『アイスドール』は、笑わない。体操の世界女王は、かつて、どこか冷たさの漂う横顔で舞い、跳んだ。近づきがたい気品と風格。だから、人は彼女を『氷の人形』と呼んだ。」。そして、結びは「得点は、さして出ないだろう。だが、点数では表せない体操の魅力を、きっと彼女は伝えてくれる。あなたはもう『氷の人形』ではない。」だった。

この原稿で書きたかったのは、ボギンスカヤというソ連が生んだ最後の世界女王のことではなく、激動の中を生き抜いた一人の女性の生き様だった。ステートアマとして笑えなかったアイスドールが、体操を愛する一人の女性として笑顔で演技できるようになった、ということを書き残したかったのだと思う。

五輪はメダルがすべてではない。ある意味、生き様が、非常に純度の高い結晶のように凝縮され、立ち現れてくる舞台だと感じる。五輪取材はこんな得難い一期一会の機会も与えてくれるもので、これもまた、現場の醍醐味だと思う。

4.6 世界を映す五輪

ボギンスカヤの半生を通じて、五輪は人生を映すものである、ということについてお話を

をさせていただいたが、最後は視点を変え、「世界を映す五輪」ということについて触れたいと思う。

論説委員時代に2010年のバンクーバー冬季五輪を取材したのだが、キーワードのひとつとして私が感じたのは「環境」だ。環境問題を五輪という存在は如実に投影している、これが現地入りしての実感だった。

上村愛子選手が出場したモーグルスキーの会場になったサイプレスマウンテンはバンクーバーの市内から海を隔てた向かい側に見える山だ。しかし五輪直前でもほとんど雪がなく、干し草のブロックを敷き詰め、その上に、ヘリコプターで運んできた雪を乗せて設営するというような状況だった。2月12日の開幕に向けて、3日前までヘリで雪を運んでは圧雪する作業が続いた。当時のIOCのロゲ会長は冬季五輪の将来を案じ、「地球温暖化が深刻な懸念になりつつある」と発言していた。

特に冬の五輪は地球温暖化の問題と直結している。冬季スポーツは温暖化が進んでは成り立たない側面が多々ある。主に経済的側面から、冬季五輪に立候補できる都市自体が世界的に限られているが、温暖化という要因が重なると、冬の五輪開催はますます厳しくなる。バンクーバーから送った社説^{注7)}の結びには、こう書いた。「五輪を未来へつないでいくことは、私たちの地球の将来を切り開く作業でもある」。

直近の東京五輪はコロナ禍の開催で賛否両論が巻き起こった。その歴史的な評価は、数年がかりの検証を待たねばならない。そして新聞というメディアは大会をロングスパンで検証し、五輪を再考する材料を広く提供する責務があると思う。

五輪は人種差別問題、経済問題、国家間対立の問題、テロ問題、疫病を含む環境問題など、あらゆる問題が必然的にあぶりだされてきている。これは五輪という地球規模の舞台装置が持つ必然であり、世界の今が投影される存在、世界を映す鏡のようなものだと思う。そのような五輪を通じて、これから世界のありようを考える、こうしたクリティカルな議論の起点になり得るのも、五輪という舞台装置のもつ一側面ではないかと思う。

【注】

- 注1) 大阪毎日新聞社 1908年9月7日付朝刊
- 注2) 東京朝日新聞社 1912年7月9日付朝刊
- 注3) 日本新聞年鑑 第11巻（日本図書センター、1986年）
- 注4) 朝日新聞社史 大正・昭和戦前編（朝日新聞社、1991年）
- 注5) 朝日新聞社 1964年10月10日付夕刊
- 注6) 朝日新聞社 1996年7月26日付朝刊
- 注7) 朝日新聞社 2010年2月12日付朝刊

＜黒田勇（理事・関西大学教授）のコメント＞

お話を伺っていて思ったのは、1932年のロサンゼルス大会、そして1984年のロサンゼルス大会、この二つのロス大会が、日本のメディアにとっては大きな転機になっていて、新聞にとっては販売競争の中での「金の成る木」としてオリンピックが位置付けられた、それがまずは32年のロス大会であったのかなと思いました。84年大会は、初の民営化大会で放送権料高騰のきっかけになりました。

あと、テレビは放映権料を払うが、新聞は報道権料を払わない、というのは当然のことになっているのですが、今回、JOCのオフィシャルパートナーに4つの新聞社が名乗りをあげています。新聞という報道メディアが、取材の対象に資金を提供することはジャーナリズムとしてありなのか、なしなのか？　この点はどうでしょうか。

あと、ボギンスカヤの話は感動して拝聴しましたが、オリンピックが映像として消費される中で、新聞には何ができるだろう、ということをお話いただければと思います。

＜速水徹（主席研究員・元朝日新聞論説委員）の返答＞

経緯を振り返りますと、まずJOCオフィシャルパートナーについては、2002年から読売がオフィシャルパートナーに入ります。基本4年間の契約です。この時点では読売のみで、単独でした。そのあと、2009年からはオフィシャルパートナーの上の「JOCゴールドパートナー」というものをJOCはつくります。アサヒビールなど6社でした。この時点で、読売は格上のゴールドには移っていません。

読売が2002年からオフィシャルパートナーになったのは、当初は2016年東京オリンピック大会開催を想定し、新聞社独占のパートナー契約を狙ったのだと思います。五輪が東京に来るとして、五輪組織委員会とのパートナー契約を目指すため、下ごしらえとしてJOCのオフィシャルに入っていたのだと考えられます。

ただ、2013～2016年には読売はJOCオフィシャルパートナーから外れています。そしてそのあとの2016年から読売、朝日、毎日、日経が入っています。これらはJOCオフィシャルパートナーですから、契約は当然JOCです。読売の1社独占プランはここで消え去りました。

一方で同時並行的に、2016年から、東京オリンピックの組織委員会と、1業種1社の五輪のルールを撤廃したマスコミとしてのパートナー契約を結んでいます。私は上記のJOCオフィシャルパートナーとの「セット」だったのではないかと思っています。

他社がオフィシャルパートナーに入ったいきさつについては詳しく知りませんが、朝日新聞社の場合は、五輪憲章でうたわれている「スポーツを通じ、若者を教育することにより、平和でより良い世界の構築に貢献する」という理念、オリンピックムーブメントに共感してパートナーシップを結んでいます。その時点で社告と特集記事を掲載し、オフィシャルパートナーとしての活動と、言論機関としての報道は一線を画します、ときちん明示し、読者にお伝えしています。

よく誤解されるのは東京オリンピック大会のオフィシャルパートナーということで「大会」に焦点があたってしまいがちですが、朝日新聞社がとったスタンスは、組織委員会とのパートナーシップも、JOCとのそれも、オリンピック暦に由来する、4年間を1単位とするオリンピアードを支援するという考え方であり、10数日間の競技大会だけを支援するという発想ではありません。ですので、朝日新聞社の場合は、私がオリンピックパラリンピック・スポーツ戦略室長の時に企画して、他の五輪スポンサー企業を巻き込んで始めた、健常者と障害者が一緒に街を歩くウォーク大会「ジャパンウォーク」を、オリンピアン、パラリンピアンにも参加いただき、数年にわたって継続してきました。

東京五輪の中止を主張した社説を書きながら、五輪スポンサーであり続けるのは矛盾している、という批判を朝日は受けていましたが、今お話ししたオリンピアードの考え方に基づいて大会までの数年間、オリンピックムーブメントの支援をしてきたわけで、コロナ禍との見合いで大会は中止すべきである、という社説を掲げたことに論理矛盾はない、と私は考えています。

あと、組織を離れた個人的な立場で、ということで言うならば、ジャーナリズムが、自ら取材する対象に資金を提供するということは好ましくないと考えます。公平公正であること、偏らずにファクトだけを伝えること、あるいは取材対象に対して常にクリティカルな姿勢を保つことという筋論になぞらえれば、間にお金が介在するということは避けるべきではないかと思います。

一方で、今日お話ししてきたように、商業紙という新聞メディアの成り立ちを考えたときに、歴史的な事実として、日本では新聞メディアがスポーツ界を金銭的に支援し、同時に報道を通じて支えてきた、それが結果として商業紙としての発展にもつながってきた側面は、現実面としてあると思います。

朝日の場合であれば、例えば、社会人ラグビーを戦後、本当に長く支えてきました。その流れの中に新日鉄釜石や神戸製鋼の7連覇があり、さらにワールドカップでの躍進もあったという見方ができると思いますし、柔道や駅伝といった競技も、かなりの支援をしてきています。そのことで、記事の出稿量が増えるということがあっても、何か問題が起きたときに筆が鈍ったか、ということでいうと、そのようなことはなく、是々非々で対応をしてきたと思います。

それから、五輪がテレビで流され、消費されていく中、新聞の役割は、というおたずねですが、それは「取材対象に肉薄する」ということだと思います。ボギンスカヤの取材の時は本当に、あんなに冷たい顔をして演技していた選手がなぜ笑っているのか、というのが素朴な疑問で、何かがあるはずだ、と。取材は受けくれないだろうと思ったのですが、申し込んでみると、どうぞ来てください、と言われたのです。

新聞は速報性という意味ではテレビはもちろん、ネットにも劣るわけですが、一番の強みは取材対象に寄れる、ということだと思います。ボギンスカヤに、五輪直前であっても会いに行ける。どうして笑えるようになったのか、ということを直接聞くことができる、という

ことだと思います。

やはり、現場に一番肉薄できるのが新聞記者だと思いますので、メディア全体の速報性が増している今だからこそ、逆に、相手の内面を掘り下げる、アスリートのインサイドストーリーを紡ぎ出すという作業は、新聞記者だからこそできる面白い仕事であり、その点こそが読まれるのだと思います。

例えば、ソチ五輪では浅田真央と葛西紀明が多くの人の印象に残ったと思うのですが、二人は金メダルを取っていません。浅田真央は規定で失敗しながら、フリーで最高の演技を見せた。葛西も金ではなかったが、メダリストになった。団体金を獲得することになる長野五輪のメンバーから外れ、最後の原田のジャンプの時にはこけろ、とさえ思っていた彼が、そのあとも競技をやめずにもがいて、ついにメダルを獲った。

だから読者の皆さんには、金メダルへのピンポイントの関心ではなく、そこへ至る過程と言いますか、アスリートの生き様に共感してくださるのではないか、と思っています。新聞はテレビとは違う意味で、こうした金メダル以外のアスリートの報道がやりやすいのではないかと思います。そのあたりに生きる道があるのではないかと思います。

《第12回セミナー》

オリパラ教育は日本社会に何をもたらしたのか

石坂友司（奈良女子大学准教授）

はじめに

本報告は拙著『コロナとオリンピック』（石坂 2021a）の第4章「オリパラ教育とボランティアの行方」をもとに、オリパラ開催前後の動向を追加するかたちで行った。筆者はオリンピック・パラリンピック（以後、オリパラと表記）のうち、特にオリンピックが日本社会や都市、地域にもたらす影響についてスポーツ社会学的観点から研究を行っているが、大会前後のオリパラ教育の実施状況については十分な追跡調査ができておらず、今後の検証見通しを示すに留まっていることを最初にお断りしておきたい。

1. オリパラ教育の展開——多様なアクター

オリパラ教育には多様なアクターが存在していて、スポーツ庁の「オリパラムーブメント全国展開事業」、東京都の4プロジェクトに代表される「オリパラ教育」、大会組織委員会の「東京2020教育プログラム『ようい、ドン！』」、小・中・高等学校、大学等による教育、スポンサー企業の関与などがあげられる。まずは開催都市の東京都が展開したオリパラ教育から見ていきたい。

オリパラ教育を行うことの説明として、東京都はオリパラが掲げる「平和でより良い世界の構築に貢献する」という究極の目標が、教育基本法及び学校教育基本法における「伝統と文化を尊重し、それらを育んできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養う」という教育目標と親和性が高いと説明している（東京都教育委員会 2016）。

ここにはオリパラを利用してナショナリズムを高めようとする政策的、教育的意図を読み取ることができる。ここで言うナショナリズムとは、吉野耕作が示した国家主導型の「創造型ナショナリズム」（祖先文化の再発見と歴史の強調）と「再構築型ナショナリズム」（他民族との境界を強調）であり（吉野 1997）、特にオリンピックのようなメガイベントはこの種のナショナリズムを高めることで知られる。一方で、オリンピックはローカルな文脈での多文化主義（多様な価値の尊重）と間文化主義（多様な価値との共生を求める対話）、そしてグローバルな文脈でのトランスナショナリズム（国境を越える経験）とコスモポリタニズム（平等な権利の探求）（西原 2015）を内包するイベントでもある。国家的なイベントでナショナリズムが高まることは必然としても、それらを相対化する視点を持ち得たのかどうかについて検証される必要があるだろう。

加えて、大会ビジョンに掲げられた「多様性と調和」はこの大会を通じてどれほど追求され、私たちに考える視点を提供してくれたのかを問うことも重要である。コロナ禍での開催ということもあり、外国選手との接触・交流がほぼ遮断された中では、日本選手の活躍のみに焦点が当たらざるを得なかった。自国開催におけるオリパラ報道という特殊な事情に加えて、海外選手の情報が伝わりづらかったという状況もマイナスに作用したと考えられる。過去最大の金メダル、メダル総数を獲得したオリンピック、過去 2 番目のメダル総数を獲得したパラリンピックではあったものの、開催の是非が問われた事前の混乱もあり、日本選手の歓喜は抑制されていたように見える。また、政策、教育で掲げられた目標は必ずしも目的通りの効果を発揮するわけではなく、学校ごとに違った教育効果が発生している可能性もある。それは今後の現地調査で明らかにすべき課題である。

東京都は重点的に育成すべき資質として、以下の 5 つをあげている。①ボランティアマインド、②障害者理解、③スポーツ志向、④日本人としての自覚と誇り、⑤豊かな国際感覚である。それに加え、「オリンピック・パラリンピックの精神」、「スポーツ」、「文化」、「環境」という 4 つのテーマと、「学ぶ」、「観る」、「する」、「支える」という 4 つのアクションを掛け合わせた「4×4 の取組」による教育活動の展開を目指んだ。コロナ禍による一年延期でこの活動がどのように影響を受けたのか、または継続されたのかについてはまだデータが示されていないが、2018 年に東京都教育委員会が出した報告書を読むと、育成すべき 5 つの資質に対して、以下のような活動が展開されていたことがわかる（東京都教育委員会 2018）。①ボランティアマインド：キャビン・アテンダントを招いてのおもてなし講座、防災訓練など、②障害者理解：パラアスリートとの交流・体験、障がい者の講話・体験など、③スポーツ志向：オリンピアンとの交流・体験、運動会エンブレムの作成など、④日本人としての自覚と誇り：落語教室、能楽講座、地域マップの作成など、⑤豊かな国際感覚：児童、生徒、留学生、大使館員などとの国際交流事業、交流国とのメール交換、英会話オンラインスピーキングなどである。

この他、東京都オリパラ 4 プロジェクトと呼ばれる、長野大会の一校一国運動にあたる「世界ともだちプロジェクト」、ボランティアへと参画する「東京ユースボランティア」、障がい者スポーツの観戦・体験、特別支援学校との交流を行う「スマイルプロジェクト」、アスリートとの直接交流を行う「夢・未来プロジェクト」などがあり、小中学校の授業に 35 時間をめどに取り入れることとされた。2017 年に公開された各学校の実施状況を見ると、小学校・中学校においては、35 時間未満の学校はほぼ 1 割以下にとどまっていて、8 割以上の学校が 35 時間～69 時間の活動を展開したことがわかる（東京都教育委員会 2017）。高校ではその実施割合は多少下がるもの、それでも 5 割以上の学校が 35 時間～69 時間の活動を展開している。各教科のカリキュラムが十分な時間を確保できていない現状にあって、オリパラ教育にこれだけの時間が費やされたことは驚きの事実であり、そこで達成された教育価値が問われてくることになるだろう。

2. 全国展開事業

次に、スポーツ庁が主導したオリパラ・ムーブメント事業について見ておきたい。これは、スポーツ庁、内閣官房、大会組織委員会、JOC、JPC、日本財団パラリンピックサポートセンター、全国中核拠点に指定された三大学（筑波大学、日本体育大学、早稲田大学）などが連携して、全国の「オリ・パラ教育推進校」の支援を行うというものである。全国展開事業の展開例については、中核拠点の三大学が作成した報告書からうかがい知ることができる。

例えば、早稲田大学の関わった事例を見ると、この事業ではセミナー、ワークショップの開催・支援、オリパラ教育実践への支援、全国フォーラムの開催などが行われた（友添ほか2019）。実践例は内容から、I. スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び（＝「ついての学び」）、II. ボランティア、III. 共生社会、IV. 日本の伝統、V. スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成（＝「通じた学び」）の5つのカテゴリーに分類される。このうち1年目はI. スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学びが多かったものの、2年目以降はV. スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成が増えていったことが報告されている。これは単に出来事の歴史や知識を学ぶことから、それを通じた学びへと深められていった可能性が示唆される。

各学校で実施された科目もそれぞれ傾向が異なっており、例えば、小学校では総合の時間、中学校では体育・保健体育科、高等学校ではその他の時間、特別支援学校では体育・保健体育科、その他の時間に一番オリパラ教育が実施された割合が高いことが報告書から読み取れる。このことは、スポーツと言っても、体育・保健体育科のみで教育が完結したわけではないことを示している。

その他、組織委員会と全国の大学が結んだ連携協定によって、各大学が様々な教育やイベント、シンポジウムなどを実施した。報告者の大学では、学問的にオリンピックを議論することを目的として、2013年から毎年「オリンピック・シンポジウム」を実施してきた。シンポジウムには社会学者や歴史学者などを招聘して、教員と学生が参加して討議が行われた。その成果は2冊の編著として刊行していて、オリンピックを通して見える社会についての考究が深められたと考えている（小路田・井上・石坂編 2018、石坂・井上編 2020）。

3. 学校観戦プログラム

オリパラ教育最大の目玉の一つとして考えられていたのが、公立学校から80万人余り、私立学校から9万人余り、合わせて約90万人の小中学生・高校生などにオリパラを観戦してもらう学校観戦プログラムである。1964年の東京大会でも、テレビを通じた小学校などの試合観戦、記録映画『東京オリンピック』の観覧が行われ、現在のシニア層、高齢者層の集合的記憶を形作っている。

しかしながら、この期待された観戦プログラムもコロナ禍による影響を大きく受けることになった。例えば、オリンピック観戦は無観客開催になったことで実施されず、茨城県カ

シマサッカースタジアムで昼間に開催された、サッカー男女一次ラウンド 3 試合を対象に鹿嶋市、つくばみらい市などの県内小、中、高校、23 校の約 4 千人が観戦したのを除き（『毎日新聞』2021.7.15）、都内の学校などでは観戦が中止された。

鹿嶋市は韓国西帰浦（ソギボ）市と日韓 W 杯以来の姉妹都市として交流を続けており、韓国対ニュージーランドの試合を観戦した。大会後も交流を継続している事例としては、鹿嶋小学校が 3 年生の外国語の授業で、「アフターオリンピック企画」として、一緒にサッカー応援をしたニュージーランドの教員と英語でオンライン交流などを行っている（同校ホームページより）。

一方で、オリンピック後の 8 月から開催されたパラリンピックでは、「教育的な意義を重視」すると説明され、安全対策を講じたうえで実施が決定された。都内の 8 自治体約 13 万人、都立 23 校約 2 千人が 12 会場で観戦を予定した（『朝日新聞』2021.8.18）。しかしながら、開催の判断は 1 都 3 県それぞれの地域で分かれ、江東区や港区は実施を予定しながらも、直前に中止し混乱を招いた。中止を決めた理由について、例えば港区教育委員会では、東京都教育委員会から示された、参加上限人数を割当総座席数の半分の人数とする指針について、「観戦の機会を均等に提供できない」ことから中止を決めたと説明している。

また千葉県では、7 市町 207 校の約 2 万 6 千人が観戦を予定していたものの、引率教員の感染が確認されたことで急遽中止を決定した。中止が決定された 8 月 30 日までに 6 市町 92 校の計 3292 人が観戦を行った（『朝日新聞』2021.9.5）が、多くの学校が機会を失った。

新型コロナウイルスの感染状況はオリンピック開催期以上にパラリンピック開催期の方が悪化していたと言える。それにもかかわらず、オリンピックでは認められなかった学校観戦がパラリンピックで認められた背景には、純粋なリスク判断ではなく、あくまでも教育現場での多様性、共生社会の大切さを知る教育効果が優先されたものだった。オリンピックと比べて、パラリンピック観戦の方が反対が起きづらいという構造的な要因もさることながら、参加する児童・生徒と参加しない児童・生徒の機会の不平等がもたらされたことは問題である。仮に観戦の教育効果が十分にあったとしても、感染リスクへの怖れから観戦を行えなかった児童・生徒がいるとき、それは教育として正しい選択だったのかについては疑問が残る。

ところで、20 年ほど前に書かれた先行研究に目を向けると、パラリンピックをめぐるスポーツ表象に大きな変化が起きていることが確認できる。アダプテッド・スポーツの研究者である藤田紀昭は、長野オリンピックを題材にした研究で、新聞などに見られるメディアの表象が障がい者とその身体から目を背けるように構成されており、障がい者であることがわかるように、頑張っている写真が選ばれる傾向にあったことを指摘している（藤田 2002）。また、渡正は、アーヴィング・ゴッフマンの概念を読み替えた北田暁大の「儀礼的関心」という言葉を用いながら、64 年大会ではほとんど描かれなかった障がい者の身体が、長野大会以降のスポーツ化によって、「見た」ように振る舞うこと（＝「儀礼的関心」）で、表象され始めたことを示している（渡 2010）。

今大会の 500 時間を超えるとされる放映によって、パラリンピックをめぐる障がい者アスリートの表象は大きく変化すると考えられるだろう。それはよりいっそうのスポーツ化によって、障がい者の身体と競技そのものへの注目がなされることでもたらされる変化である。このことは渡が指摘するように、障がい理解や共生社会実現の一つの手段になることが期待される一方で、パラアスリートによって障がい者を代表させたり、エイブリズム（「できない」より「できる」方が良いとする考え方）によって障がい者を見てしまったりするとの問題もはらんでいる（渡 2020）。

4. オリパラ教育は何をもたらしたのか

長野大会で実施された一校一国運動は、大会後 10 年を経過してもなお、いくつかの小学校で継続されていた。その成果について検証した教育学者の高木啓は、①教育的効果（友好、平和、オリンピズムの理解）、②学校教育に直接関わってない市民の高評価、③シドニー、ソルトレーク・シティなど、他のオリンピック大会への波及、継続が見られることをあげた（高木 2013）。そして、これらの成果は「上から下りてきたもの」という構造を持ちながらも、教師の創造的意識と関与によって、山口昌男が述べた意味での感受性を復活させる機会となる「出来事」としてとらえられると指摘している。

長野大会と東京大会を比較したとき、東京大会がオリパラ教育を大規模、かつ豊富な教材を利用しながら組織的に展開してきたことがわかる。東京大会のオリパラ教育がどのような成果を生み出しているのかについて、今後は学校での聞き取り調査を実施しながら検証していく必要があるだろう。

一方で、オリパラ教育はオリパラの理念を基調にするため、それらの価値そのものを疑い、問い合わせ議論を停止させてしまう傾向がある。教育学者の新堀通也は教育が持つそのような効果を「殺し文句」と呼んだ（新堀 1985）。東京大会の開催準備で見せつけられたように、特に現代のオリンピックは商業主義的な価値に浸され、ポジティブな側面ばかりではなく、ネガティブな側面をも内包している。近代オリンピックの創設者クーベルタンの研究者で、スポーツ史学者の和田浩一は、スポーツやオリンピックが教育に値するものなのかを考えることが、「オリンピック教育」に求められる機能の一つであり、そのことをクーベルタンも考えていたことを指摘している（和田 2010）。そもそもオリンピズム、オリンピック教育という言葉はクーベルタン自身の言葉ではなく、彼自身は体育、スポーツ、文学、哲学などの様々な専門家が参集して、オリンピックを超える教育学を構想していたとされる。

今大会はコロナ禍が大きな影響をもたらした。学校観戦プログラムや各国の選手団との交流が制限されたという意味において、オリパラ教育の成果は縮減したと考えて良いだろう。一方で、一年の延期を経て、開催の是非をめぐってオリパラの意義が改めて問い合わせたことで、私たちは「スポーツのチカラ」やオリンピズムについて今一度考え方をきっかけを得た。そこではスポーツやアスリートが社会の一部でしかないという当たり前の事実に

対する気付きがあったように思われる。この大会で準備され、経験されてきた豊富な学習内容をどのように活かしてきたのか、あるいはこれから活かしていくのかがオリパラ教育の成否を握っている。

そして、オリパラ教育で展開された学びの内容が、予定調和的なレガシーを超えたとき、初めて教育的価値が高められたと言えるのではないだろうか。そのことは大会後に引き続いて学校教育で行われる計画となっているオリパラ教育においても問われ続けなければならない。

＜引用・参考文献＞

藤田紀昭、2002、「障害者スポーツとメディア」橋本純一編『現代メディアスポーツ論』世界思想社、197-217。

石坂友司、2018、『現代オリンピックの発展と危機 1940-2020——二度目の東京が目指すもの』人文書院。

——、2021a、『コロナとオリンピック——日本社会に残る課題』人文書院。

——、2021b、「東京オリンピック・パラリンピックは何を生んだのか」『都市問題』112(10): 4-13。

石坂友司・井上洋一編、2020、『未完のオリンピック』かもがわ出版。

石坂友司・松林秀樹編、2013、『〈オリンピックの遺産〉の社会学——長野オリンピックとその後の十年』青弓社。

——、2018、『1964年東京オリンピックは何を生んだのか』青弓社。

小路田泰直・井上洋一・石坂友司編、2018、『〈ニッポン〉のオリンピック——日本はオリンピズムとどう向き合ってきたのか』青弓社。

西村和久、2015、「越境する実践としてのトランサンショナリズム——多文化主義をこえるコスモポリタニズムと間文化主義への問い」『グローカル研究』2: 1-24。

西村大志、2019、「『安全安心』の創造--お礼効果とその構造」ミツヨ・ワダ・マルシアーノ編『〈ポスト3.11〉メディア言説再考』法政大学出版局、61-80。

新堀通也、1985、「殺し文句」の研究--日本の教育風土』理想社。

高木啓、2013、「『遺産』としての『一校一国運動』--長野市立徳間小学校の取り組みを中心に」石坂友司・松林秀樹編『〈オリンピックの遺産〉の社会学』青弓社、134-49。

東京都教育委員会、2016、『「東京都 オリンピック・パラリンピック教育」実施方針』東京都教育委員会。

——、2017、『オリンピック・パラリンピック実践事例集』東京都教育委員会。

——、2018、『オリンピック・パラリンピック実践事例集』東京都教育委員会。

友添秀則・深見英一郎・吉永武史・岡田悠佑・根本想・竹村瑞穂・小野雄大・青木彩菜、2019、「2017年度におけるオリンピック・パラリンピック教育実践の取り組み——早稲田大

学オリンピック・パラリンピック教育研究センターの担当地域に着目して』『スポーツ科学研究』16: 1-13。

筑波大学オリンピック教育プラットフォーム／日本体育大学オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業／早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター編、2018、『令和2年度スポーツ庁委託事業 オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業実践事例集』。

和田浩一、2010、「オリンピズムという思想——新しいオリンピズムの構想への序章」『現代スポーツ評論』23: 62-71。

——、2018、「近代オリンピックの創出とクーベルタンのオリンピズム」小路田泰直ほか編『〈ニッポン〉のオリンピック』青弓社、32-57。

渡正、2010、「パラリンピックの表象実践と儀礼的関心」橋本純一編『スポーツ観戦学——熱狂のステージの構造と意味』世界思想社、230-51。

——、2020、「障がい者スポーツにもたらされるべき変化とは」日本スポーツ社会学会編集企画委員会編『2020 東京オリンピック・パラリンピックを社会学する』創文企画、130-50。

吉野耕作、1997、『文化ナショナリズムの社会学——現代日本のアイデンティティの行方』名古屋大学出版会。

＜杉本厚夫（代表理事・京都教育大学・関西大学名誉教授）のコメント＞

私は中学校1年生の時に1964東京五輪を経験していますので、その私的経験から今回の東京2020オリンピックがどのような教育的意味を持っていたのかのコメントをしたいと思います。東京に住んでいる子どもたちは、動員によって実際に競技を見に行ったりしたようですが、私は関西に住んでいましたので、中学校の講堂で授業時間にテレビでオリンピックを見たことと、市川監督の映画「東京オリンピック」を学校から見に行った記憶があります。実際にオリンピック教育を受けた記憶はないのですが、オリンピックは「参加することに意義がある」ということと、「平和の祭典」であることを学校で学んだように思います。

都市について言いますと、1964東京五輪を契機として、新幹線、高速道路、モノレールなどインフラが整備されたことに驚きました。それは、これまで夢でしかなかったものが実現するという驚きです。さらに、東京への憧れも増幅し、一極集中化が進んだと言えます。ところが、今回の2020東京オリンピックでは、都市のインフラの整備は逆に環境問題の面から再検討しなければいけなかつたし、地方創生の時代にあって東京の都市機能が問われなければいけなかつたのではないかと思います。

国際化という点から言いますと、当時のテレビで流されていた外国テレビ映画は、ほとんどが米国からの配信でした（パパは何でも知っている、ララミー牧場、ベンケーシー、サンセット77等）。つまり、外国と言えばそれはアメリカだったのです。しかし、それ以外のヨーロッパやアフリカからのアスリートが民族衣装で入場行進してくる姿を見て、当時のテレビ番組「兼高かおるの世界の旅」が現実のもとなつて、初めて世界に目が開かれたのです。今回の2020東京オリンピックでは、コロナというパンデミックを国際という視点から考える機会にできなかつたのかと残念に思います。

政治の面からは、1964東京五輪では、自衛隊のブルーインパルスが五輪の輪を空に描いたことは、とても印象的でした。それは、戦闘機がオリンピックという平和の祭典に貢献したことによって、日本は平和国家を構築することを世界にアピールしたという意味で誇らしく思ったものです。その点から、今回の2020東京オリンピックでは、日本の目指すべき方向性をどれだけアピールできたかと言えば、疑問しか残りません。

メディアの面からすれば、テレビの神話が生まれたのが1964東京五輪ではなかつたかと思います。その象徴的な映像は天皇の開会宣言です。はじめて天皇の声をテレビで聴くことができ、学校で習った象徴天皇の意味が分かつたように思いました。それにもまして、テレビが真実を伝えるメディアとして認識したことも否めないと思います。しかし、メガメディアイベントとしての放送権料で成り立っているオリンピックを知ってしまった東京2020オリンピックでは、テレビメディアの神話性とその功罪について学習すべきではなかつたでしょうか。

経済の点からすれば、服部時計店（セイコー）がSEIKOというロゴで電光掲示板の下に書かれているのを見て、Made in Japanという日本の製品が世界に認められることにつ

いての矜持を感じたものです。そのことは、今後の経済成長を予見させるものとなりました。しかし、東京 2020 オリパラでは、経済成長の終焉と経済格差の問題に日本としてどのように取り組んでいくのかということが見えなかつたのは残念です。

このようにみてくると、今回の東京 2020 オリパラは、その時代背景が大きく変わっているのにもかかわらず、1964 東京五輪を再現したいという「ノスタルジー五輪」と言つても良いのではないかと思います。

このような状況をふまえて、「東京オリンピック・パラリンピック教育を考える有識者会議」が提案した重点的に育成すべき 5 つ資質について考えてみたいと思います。

(1) ボランティアマインド：今回のボランティアが自己実現を目的として募集されていることに現れているように、公益性の欠如が露呈しました。その公益性の欠如が、多くのボランティアの辞退者を生んでしまつたという矛盾を孕んでいました。

(2) 障害者理解：このことは、長野五輪から始まつていて、すでに子どもたちは理解が進んでいると思います。それよりも、現代的なテーマとしては LGBTQ や民族の問題など隠れた差別の理解ではないでしょうか。

(3) スポーツ志向：相変わらずの金メダル争いのメディア報道で、新たなスポーツ文化は提示できたでしょうか。スケートボードという遊びとしての本来のスポーツ文化ですら、最年少の金メダリストをアピールすることで絡み取つてしまつました。

(4) 日本人としての自覚と誇り：コロナ禍で十分な練習もできずに来日した海外のアスリートに対して、誘致の時のキーワードである「おもてなし」をどのようになされたのでしょうか。規範意識と公共の精神を学ぶとありますが、その中身が具体性に欠け、曖昧なゆえに達成することは難しかつたのではないかでしょうか。

(5) 豊かな国際感覚：コロナ禍でオリパラ大会を開催したことの意義や理由が述べられていなかつたことは、逆に国際感覚のなさを露呈したのではないかと思います。

＜石坂友司（会員・奈良女子大学准教授）の返答＞

1964 東京五輪は、見るという経験自体が教育的であったと思いますが、今回の東京 2020 オリパラは、教育のカリキュラムがあらかじめ設定されていたので、小学校から大学までやらなければならないという状況で展開してきたと思います。しかし、なぜ、オリパラ教育をしなければならないかの意義が欠けていていました。たとえば、大学生はクーベルタンを知らないし、オリンピックは平和の祭典であることすら知らない学生が多いと思います。そのことを知識として知る以上に、オリンピックがどれだけ世界平和に貢献したであるとか、オリンピズムの理念はどこにあったのかといったことが問われる必要があつたと思います。

また、小学校でボランティア体験をしたところはいくつか見られましたが、オリンピックが最初に「おもてなし」を掲げて誘致したわりには、限定的な活動に留まつた感はぬぐえないとひいえます。とりわけ、コロナ禍でボランティアの活動も制限されていたので、そ

の教育的効果は薄かったのではないかと思います。

今回、なでしこジャパンが膝について人種差別に抗議したということがあり報道されました。どこか他人事で、日本の中でもまだ差別が存在するにもかかわらず、そのことが焦点化されなかったことは残念なことです。

オリンピックの理念は商業主義の前にはなすすべがなかったと思います。そのことを一般の方々が気づかれたことは有意義であったと思います。ただ、オリンピックを商業主義からどのように価値で救い出すのかが見えずに終わってしまったのです。

一方で、スケートボードにみられたように、国を越えてお互いを称え合うというシーンは多くの人には新鮮に映ったのではないでしょうか。このような価値観の中でオリンピックは展開できる可能性があるのだということだと思います。そのことは、今回の東京 2020 オリパラが、ナショナリズムを前面に出していたことの裏返しでもあると思います。その背景には、日本人の活躍を中心に報道した日本のメディアがあるかと思います。国際化という面では、コロナ禍でホストタウンとして海外のアスリートと接触ができなかったことは痛手だったと思います。

検証はこれからですが、今回の東京 2020 オリパラは、なぜオリンピックを開催するのかということが曖昧なまま行われた大会で、教育的効果は十分に見込めないのでないかと考えています。

子ども未来・スポーツ社会文化研究所季刊誌第4号（2021年冬号）

発行日 2022年1月23日

編集・発行者：子ども未来・スポーツ社会文化研究所（代表理事 杉本厚夫）

編集委員：杉本厚夫、西山哲郎、速水徹、谷口輝世子、三角さやか、尾島祥

一般社団法人 子ども未来・スポーツ社会文化研究所

Research Institute for the Future of Children and Sport Social Culture

<https://fcssc2020.jp> E-mail:info@fcssc2020.jp

